
Gustav - 悪魔に捧げる夜想曲 -

D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G u s t a v - 悪魔に捧げる夜想曲 -

【Nコード】

N 2 4 6 7 F

【作者名】

D

【あらすじ】

月の灯る、とある夜。ひとつの事件が起こった。嘆く女、怒る男、そして――観察する者。人の心に奥にあるのは罪か罰か。エドガーは暴行された妹のために犯人を追う。

ブローグ

夜気に包まれた街並み。

だが通りは明るかった。幾百年前と変わらない、石造りの古びたデザインの建築に新しい時代の電飾の光が灯っている。

ブリテンの国、リノンの街。人口八十万ほどの、中規模の都市である。大通りは夜になっても交通が忙しく、車は進んだり止まったり、いつも軽い渋滞を起していた。

「さあ、どけどけ！」

車道をつっ切る一台の車。

青と黄色の大柄の格子模様という派手な配色のボディに青いライトを乗せ、耳障りなサイレンを鳴らしている。それはパトカーだった。大きくて邪魔くさいトロリーバスや他の車の波間を滑るように進んでいく。その特権に満足して男は口の端を吊り上げる。

エドガー・ウィリアムズ。

三十を目前にした刑事課の巡査だった。肌は黒く、頭は禿げ上がっている。かつちりした制服から伸びた腕は太く、鍛えた抜いた体は大きかった。

「よし、ここだな……」

そこは病院だった。

車道の脇に車を止めると彼は外していた帽子を被る。

これから仕事だった。暴行された婦女が保護されたという通報を受け、治療を受けた彼女から事情聴取しなければならない。珍しいことではなかった。この街では犯罪が彼らを眠らせてくれることはない。殺人、暴行、恐喝——事件のない日は一日とて、ありえない。そして今夜もいつものようにそれが起こっただけだった。

「まったく、夜勤は損だぜ」

車を降りながら愚痴る。

犯罪の発生率は断然、夜が多かった。暗闇と月は人の邪悪な心を呼び覚ます。だが果たして、本当にそうなのか。夜の国から悪魔がやってきて人間を操ってるだけなのではないか。エドガーは後者のほうであればいいと思った。それなら悪魔を憎むことができるから。

病院の受付。

院内は目が眩みそうになるほど明るく、人が溢れていた。包帯だらけの入院中の患者が横切り、薬の処方を受け取りにきた老婆が椅子に座って、ちょうど事故か何かで傷だらけの男が担架に乗せられて過ぎ去っていく。そんな中、エドガーの目配せだけで受付の女性はその部屋です、と手で近くの通路を案内した。

奥へ進むと診察室がある。

中を覗つてみる。医師用の机があり、その前に患者用の椅子がある。その椅子にうなだれるように腰掛けた女性の姿があった。俯いていて表情は見えないが、背中の後ろまで伸びた黒髪と薄汚れた赤いドレスから覗く黒い肌が見える。彼女の前に立ち尽くしていた医師は、エドガーの姿を見つけ軽く首を振った。

「目立つた怪我はありません……しかし」

その先は語らなかったが、容易に想像できた。

医師はエドガーの横を通り過ぎて部屋を出て行った。医者役目はここまで、ということだろう。

「……辛いかも知れないが、犯人を逮捕するために協力してくれないか？」

静かに声を掛ける。

やりきれないという気持ちはいつもあった。暴行を受けた女性の多くはショックから立ち直れず塞ぎ込んでしまう。そんな彼女たちを事情聴取しなければならぬのはエドガーにとっても苦痛だった。厳つい巨軀に似合わず、似顔絵を描くことができる特技のせいではないが、こんな役目を任されている。

女性は俯いたまま、黙り込んでいる。

思い出したくもないのだろう。被害者の女性たちは犯人逮捕に積極的であることはそう多くない。本当はそつとしてやりたいところだが公務である以上、やらなければならない。

「名前を覚えてくれないか？　俺はエドガー・ウィリアムズ」

すると女性は、ぱつと顔を上げた。

その表情は歪んでいた。殴られた痕があるわけではない——驚愕と悲痛、そして戸惑いが表情を複雑にしていた。

「エド……」

「な……ジュリア！？　どうして」

彼は絶句した。

その女性をエドガーはよく知っていた。自分の妹を間違えるわけがない。ジュリア・ウィリアムズ。彼女こそが被害者だったのだ。他人事でしかなかったはずの事件が急速に現実味を帯びてくる。

「どうして」

弱々しく立ち上がったジュリアをエドガーは抱き締める。

「どうして……お前なんだ」

「いめんなさい……」

絶望するエドガーに、ジュリアは慈悲を乞うように謝罪した。

第一話

「大丈夫か？」

ジュリアは肯定も否定もしない。

混乱はすでに落ち着き、彼女はまたうなだれたように椅子に座っていた。エドガーは身を屈め彼女の手を握っている。血の繋がった家族でありながら、何もしてやれないことを彼は悔しく思う。被害者の女性たちを哀れに思っていた彼だったが、それだけだった。いつもならば。

（ちくしょう、許さねえ！）

彼は怒り狂っていた。

妹を落ち着かせるため表情は出さないが、内面は嵐のように荒れ狂っている。悲しみはすでに過ぎ去り、怒りが満ちていたのだった。必ず犯人を見つけ出し、復讐しなければならぬ。警官である前に、一人の兄として。

「ジュリア、教えてくれ。犯人はどんな奴だったんだ？ 白人か？ 黒人か？ 知っている奴か？ 知らない奴か？ 服装、身長は？ 一人か？ 複数か？」

「……………」

彼は完全に頭に血が上っていた。

質問を何度も並べジュリアに問う。だが彼女が口を開かないことに苛立ちを覚えていた。

「お前を傷つけた奴を一刻も早く、捕まえたいんだ。絶対に許すわけにはいかん」

「……覚えてないのよ……思い出したくない」

彼女は首を振った。

何も話したくない、そういうジェスチャーだった。しかしエドガーは構わず続ける。

「俺を信じてくれ、犯人をすぐに――」

「失礼……少し、そつとしてやったらどうだい？」

背後から声を掛けられる。

エドガーは怒りの矛先をそちらに向けた。部屋の入り口に立っている見知らぬ男に威嚇の視線をぶつける。

「そんなに睨まないでくれ。僕も事件の関係者なんだ」

「なに？」

男はおどけるように言う。

どこか胡散臭い男だった。鮮やかな金髪は短めに切り揃えられ、目元に縁の丸い眼鏡を掛けている。蝶ネクタイをしたタキシードは滑稽な舞台衣装にも見えた。彼はおもむろに懷から名刺を取り出してエドガーに渡す。

「僕はグスタフ・エヴァンズ。彼女を保護したのは僕なんだ」

名刺を見てエドガーはますます不機嫌そうな顔色を浮かべる。

「探偵だと？」

「いかにも。君たち警邏とは親戚みたいなものさ。仲は悪いがね」

笑えない冗句だった。

ジュリアを保護したのが彼なら、第一発見者ということだろう。そして、容疑者の候補でもある。警察に通報した者が実は犯人だった、というオチは不思議とよくあることである。例え探偵だろうと警官だろうと——この街で信用できる人間はいない。

「……………」

ジュリアの様子を覗くと、彼女はグスタフを見上げていた。

何か言いたげな視線を投げかけているのがわかる。だがそれが何なのかわからない。

「それで、お前は犯人を見たのか？」

エドガーは試すように探偵を見据えた。

軽薄な感じのする表情だった。何か楽しんでいるようにも見える。罵倒して追い出してしまいたいところだが、手がかりを持っているとなればそうもいかない。

「そうだな……残念ながら、暗くて見えなかったんだ」

逡巡するような素振りを見せて彼は言った。

明らかに嘘を言っている。彼は何かを知っている。エドガーは直感した。彼が事件に関与しているという疑いも捨ててはならない。

「良ければ捜査の手助けをするよ。いつでも連絡をくれ」

狙いは金か。

真実を知っていながら、それを隠している。そして探偵という職業を建前にして情報と金を交換しようとするのもいつものりなのか。エドガーは胸中で舌打ちする。

「失せろ」

そう吐き捨てる。

グスタフは肩を竦めて素直に廊下へと消えていった。

（探偵の世話などにはならん）

手にしていた名刺を握り潰す。

ジュリアが話せるようになるまで時間が要るだろう。エドガーはそれを認め、それ以上追求しようとはしなかった。

第二話

「パーティーだったのよ」

リノンの街並みを一望できるオフィス。

使われていない会議室を借りてエドガーは聞き込みをしていた。そこはジュリアの務めているオードリーという化粧品会社のビルだった。縦に伸びた会議用の机の端に、エドガーとジュリアの同僚の女性だけが座っている。

「何の？」

エドガーはメモを取りながら問う。

「社長の息子さんのバースデーパーティー。殆どの社員は参加していたはずよ……彼女も来ていたわ」

「ふむ……」

考え込む。

社員の男性だけを集めても五百人ほどいるだろうか。パーティーの参加者を一人一人調べるのは骨が折れそうだった。しかも犯人が外部の人間である可能性も十分にある。当人のジュリアは未だに口を開かず、目撃者である探偵も当てにはできない。

（だが俺はやるぞ）

意気込みは十分だった。

例え本当に骨が折れてでも犯人を探し出す。エドガーは本気だった。

「えっと……他にはまだ？」

「あ、ああ。そうだな、何か気付いたことは？」

黙り込んだエドガーに女性が遠慮がちに声を掛ける。

何を聞けばいいのかすぐに思いつかず、ありふれた質問をした。
この質問は確かにありふれているが、なかなか有効でもあった。問われた者は取り敢えず何か言おうと、こちらが予想もしていない事柄に触れることがある。それが事件解決の糸口になることもしばしばあった。

「そうね……もしかしたら……うつん、違う」

「どうした？」

女性は目を逸らした。

後ろめたいこともあるのか、口を濁してしまふ。

「頼む、何でもいいんだ」

エドガーは彼女の目を見つめて懇願した。

警官としてのプライドはない。ジュリアの兄として事件に立ち向かう男の姿があった。

「ごめんなさい、もう行かなくちゃ」

しかし彼女はエドガーの視線から逃げるように立ち上がった。

普通ではない。この事件には何かある。女性が表情を青ざめさせて立ち去るのを見つめながら、エドガーはそう感じ始めていた。

第三話

署に戻ると夕刻になっていた。

オードリー社で二十人に聞き込み調査をしたが、大した成果は上げられなかった。ジュリアの交友関係を疑ってみたがその容疑者が五百人以上もいるのだ。誰もが怪しく感じてしまう。もしかしたら全員がエドガーを欺いているのかも知れない。そんな妄想さえ抱いてしまう。

（疲れてるな……）

素直にそう認める。

官僚に就いて十年余り。ここまで必死に仕事をしたことはなかった。自分がやらなくても誰かがやってくれる。そういう意識があったのは確かだ。きっと誰もがそうだろう。そうすることで成り立っていたのだ。今までは。

（今回ばかりは、俺の手で解決したい。しなくちゃならない）

淹れたばかりのコーヒーの表面を眺めながら思う。

署に戻ってきたのは情報を整理するためだった。大した情報はないが、まとめておくことは重要だ。どこに大きな手がかりが隠されているか誰にもわからないのだから。

「まるで刑事^{デカ}じゃないか、エド」

「ガブリエル」

にやついた笑み。

給湯室に現れたのは同僚のガブリエル・ウィンター。茶褐色の力
ールした髪はうなじの下まで伸びている。細面の長身でエドガーと
はまた違ふ意味での大男だった。

「言ってくれるな。あんまりふざけると公務執行妨害で逮捕するぞ
？」

「はっ、勘弁してくれ」

そう言っ て笑いあふ。

いつもと変わらない、くだらないやり取り。張り詰めていた緊張
が少し和らぐのを感じていた。だがしかし、ガブリエルの次の言葉
はエドガーの表情を凍らせる。

「今回の事件、手を引くんだ。俺たちに任せろ」

それが如何なる意味を持っているのか。

エドガーは知っていた。ガブリエルのチームが動くということは、
そういうことだ。

「まさか、冗談だろう？」

「いや……残念ながら、署長の判断さ」

笑みは消えていないが、瞳は哀れんでいるように見える。

ガブリエルはエドガーの手からコーヒーの入ったカップを？ぎ取って飲み干す。エドガーは空になった手をそのままに、立ち尽くしていた。

「馬鹿な」

エドガーがやっと呟いた頃、ガブリエルの姿は消えていた。

第四話

「妻がな、早く帰れっていつもうるさいんだ」

夕暮れに赤く染まった部屋。

革張りの椅子に主の姿はなかった。その人は立ち上がって身支度を整えていた。ベルナルド・フレドリク。リノン市警の署長である。

「なぜです？」

「せっかく作った飯が冷めるとか言ってな。まったく、そんなもの電子レンジで温め直せばいいだけだろうに」

ベルナルドは嘆息する。

禿げ上がった頭を中折れ帽子で隠し、肥えて丸々と膨れ上がった体を窮屈そうにスーツで閉じていた。

「違います。俺が言いたいこと、わかるでしょう？」

「……妻は美人だが、嫉妬深いのが珠に瑕でね。飯が冷めるなんて建前なんだろう」

几帳面に整えられた口髭を動かしてベルナルドは呟く。

「署長！」

「君も同じだ、ウィリアムズ君」

細められたベルナルドの青い瞳がエドガーを貫く。

虚を突かれて彼はぎょつとした。リノンの治安を重任されている男の、伊達ではない重苦しい威圧を感じた。

「嫉妬しているんだろう、君は。手柄を横取りされたくない」と

「そうじゃない——そんなことじゃない」

エドガーは拳を固く握り締める。

その腕力であれば肥えたベルナルドを打ちのめすのは簡単だろう。だが、実際に打ちのめされていたのは彼の方だった。

「同じだ。被害者が君の妹だというのは知っている。が、特別扱いにするわけにはいかん」

「あんたのやろうとしてやっていること自体がそうじゃないか!」

堪らず、エドガーは叫んでいた。

「……口を慎め、ウィリアムズ。そして、銃とバッジを出せ」

「!」

ベルナルドは醒めた表情で膨れた手を出した。

エドガーはその手を見つめたまま動けない。銃とバッジを失うということは、警官ではなくなること。否応なく、捜査する権限を奪われるということだ。

「なに、頭が冷えるまで仕事を休んでもらうだけだ」

恐らく嘘ではないだろう。

機嫌一つで部下をクビにするほど愚かではない。だが大いに愚かであるには違いない——エドガーは胸中で吐き捨てる。

腰に吊るされているホルスターから銃を抜き取り、懷から警官の証明であるバッジを取り出して、エドガーはそれらをデスクのほうへ叩きつけるようにして置く。

「……男はな、縛りつけられるほどにもがくものだ」

それは彼の妻に対してか、あるいはエドガーに対してか。

ベルナルドは、ふっと笑みを含んで呟いた。

第五話

何もしないことがこんなにも苦痛だとは思わなかった。

ずっと働き続けていたが、それは生活のためだった。正義感に燃えていたのは訓練校に居た頃と、警官になって最初の一年だけだった。正義がどこにもないことを知ってから、ただ生活のために制服を着ているだけだった。時には嫌になったこともある。投げ出すとしたことも。

（しかし今は、何もできないことが辛い）

エドガーはうめいた。

銃とバッジを没収された彼は、今はただの一般市民でしかない。倦んでいたはずの仕事をこれほど恋しいと思ったことはなかった。

「ねえ、どこか痛いのか？」

高い声と見上げる視線があった。

黒い肌の少年がソファにもたれて苦悶しているエドガーを心配そうに見つめている。

「大丈夫だ。ジョン、おいで」

安心させるために笑みを浮かべる。

ジョンはジュリアの子供だった。エドガーの甥っ子である。仕事に行っているジュリアの代わりにジョンを見ているのだった。彼には父親がいない。

「お前のママは強いな」

ジョンを膝の上に乗せて言う。

あの事件の日から三日後、ジュリアは周りの反対を押し切って出社した。まだ笑顔は戻らないが、子供のために休んでいるわけには行かないと彼女は話す。もう五年も、女手一つでジョンを育ててきたのだ。父親はジュリアが身ごもったと知った途端、姿を消してしまった。

「スパイダーマンより？」

「はは、そういう強さとは違うさ」

子供の純粋な瞳に見つめられ、エドガーの気持ちも大分落ち着く。

自分は何を必死になっていたのだろう。ジュリアはすでに立ち直ろうとしている。彼女は事件を忘れ新しく出発しようとしているのだ。それをわざわざ蒸し返す必要があるのか？ エドガーは自問する。

「あのね」

ジョンに声を掛けられ我に返る。

「なんだ？」

「……ママ、どうして泣くのかな。夜になると、泣いてるんだ」

エドガーは言葉を失う。

彼女は立ち直ってなどいない。事件を忘れてなどいない。とてつもなく深い傷を負っているのだ。辛くないはずがない。被害者の女性の社会復帰が二日三日でできるものではないとエドガーは知っていた。

「ジョン……ありがとう」

「？」

少年を下ろして、エドガーは立ち上がった。

（停職処分になっただけくらいで、燻ってる場合じゃない）

鍛え上げた体は見栄ではない。

守るために、戦うために自分は存在しているのだ。それをどこに忘れてしまったのだろうか——エドガーの瞳にはもう迷いがなくなっていた。

第六話

「どうぞ」

ソファに座るエドガーの前にコーヒークップが差し出された。

差し出した華奢な白い腕の持ち主は女性だった。ブロンドの髪は滑らかに真っ直ぐ胸の下まで伸びていた。大きな瞳はブルーアイ。ふくよかな唇を赤い口紅でより印象的に見せている。控えめなようで、どこか艶かしい、そんな色っぽさのある女性だった。

「彼女は僕の助手、アンナだ」

「アンナ・ベルです。宜しく……えへっ」

エドガーは呆然とその笑顔を眺めた。

クールな表情を一転させ、少女のように、はにかんで見せる。歳は二十くらいだろう——大人っぽい色気と子供っぽい無邪気さを兼ね備えた不思議な女性だった。

「惚れたかい？」

「ば、馬鹿をいうな！」

にやにやと頬を緩ませる男。

その縁の丸い眼鏡は見覚えがあった。グスタフ・エヴァンズ。ジュリアを保護したという私立探偵である。

「そういえば、君は付き合ってる女性はあるのかい？ 良かったら彼女をもらってくれよ」

「ちょっと！ 先生、何を仰るんですか」

アンナが怒るのをグスタフは面白がっていた。

そんなやり取りに、ここへ訪れたことをエドガーは後悔し始めていた。グスタフ・エヴァンズ探偵事務所。その応接間。自分の名前を付けただけの安直なネーミングだった。

「あんな、俺は遊びに来たんじゃない」

「ああ、わかってるよ。ジュリアの件だろう」

言いつつ、軽薄な笑みは消えない。

そのことに苛立ちを感じるが、本当に出て行くわけにはいかなかった。何としてでも、犯人を捕まえなければならない。ジュリアの笑顔を取り戻すために、平和を約束しなければならなかった。

「警察は何か掴んだのかい？」

グスタフは言いながら向かいのソファにもたれ、アンナもそれに習う。

「いや……警察はだめだ」

「どうして？」

エドガーは表情を曇らせる。

真実をグスタフに話して良いものか悩んでいた。まだ彼を信用したわけではない。だが事件を解決するためには彼の力が必要だった。決心して口を開く。

「署長の指示で特別チームが動いた。そして俺は銃とバッジを取られた」

「えっ、クビになったんですか？」

アンナが大げさに驚く。

エドガーが一瞥すると彼女は目を泳がせて大きな口に手を当てて黙った。

「特別チーム？」

構わず、グスタフが先を促す。

「ああ……署は事件を揉み消すつもりだ。そのためのチームがある。あと、クビになったわけじゃない」

「なあんだ、良かったですね！」

的外れなことに喜んでいるアンナを無視して続ける。

「時間がない。奴らが何か手を打つ前に犯人を挙げたい」

「ふーむ、なるほどね……じゃあ、エド——と呼ばせてもらうよ。君はその調査を僕に依頼するということでもいいのかな？ その場合、契約書にサインしてもらうよ」

「契約書？」

エドガーは怪訝に眉根をしかめた。

「どうやらグスタフは善意で動くほどお人好しではないらしい。やはり金を要求するつもりなのだろう。彼に頼って本当に良かったのかとエドガーは疑問を抱く。」

「えっと、後払いでいいんですが、成功報酬として三万ポンド頂きます」

「……………」

にこにこ笑みを浮かべるアンナ。

簡単に言っただけのけたその金額はエドガーの年収に匹敵していた。そうそう集められるものではないし、それほどの蓄えもない。

「おい、探偵。俺を見くびってるのか？」

凄みを利かせてグスタフを睨みあげる。

ろくに運動もしてなさそうなその優男など、一捻りで叩き伏せてしまっただろう。だがグスタフは怖気ず、にやりと笑って言い返して

くる。

「もちろん、そんなことはない。妹さんのためなら、それを払う覚悟があるんだろう?」

相手の方が一枚上手だ。

エドガーを試すつもりなのだろう。食えない男だとつくづく思われる。

「犯人が捕まったら、その倍の慰謝料を絞れますよ」

にこにこアンナ。

その時エドガーは気付いた。一番食えないのは彼女だと。

第七話

「キース・ヘルマン」

渡された資料のタイトルだった。

経歴や身長・体重・健康状態などから、交友関係や女性遍歴まで事細かに纏められている。ページをめくるとクリップで留められた写真がある。砂色の髪の毛、整った容姿をした若い男だった。ハリウツドスターだと言われても疑わないだろう。

「この二枚目の坊やが？」

エドガーの問いにグスタフが頷く。

「ジュリアが雇われているオードリー社の社長の御曹司だよ。彼のパーティーがあつたのは知っているかい？」

「ああ……事件の日のことだな」

「そう。あの日、僕はパーティーに参加していたんだ。なに、出し物の演奏をやっていただけさ。探偵である前に、ピアニストでもあるんだよ」

タタタン、と机を指で弾くグスタフ。

「奥の書斎にグランドピアノがあるんですよ。もう、それが邪魔で

邪魔で……おほほほ」

アンナはグスタフに軽く睨まれ笑って誤魔化す。

「……で、僕がパーティーに参加していたのも、ジュリアを保護したのも、偶然ではなかった。何故なら僕はキース・ヘルマンを調査するために動いていたわけだからね」

「なんだと？」

「彼の備考の欄を見たまえ——ひどいものだろう？ セクシユアル・ハラスメントで何度も訴えられている。だがその度に彼の父親……つまり社長が裁判になる前に事件を揉み消しているんだ。僕は別件の依頼でキースの素行の実態調査をしていたんだよ」

それがどう繋がるのか。

エドガーにも事の顛末が見え始めていた。女癖の悪い上司に、暴行された部下。必ずしも結び付けられるものではないが、グスタフの口ぶりが結末を決定付けていた。

「パーティーの途中だ。ジュリアは帰った。子供を預けている児童施設に迎えに行きたかったんだろ……その直後、キースの姿が消えていた」

「……………」

押し黙ったエドガー。

その視線が意味するものを知ってさすがにグスタフの顔から笑み

が消えていた。

「ああ、すまない。僕は演奏の最中ですからには抜けられなかったんだ……まったく、何しに行ったんだかね。とにかく、急いでキースを探した。パーティーの会場はホテルだったんだが、廊下の一室から叫び声が聞こえた」

その先を聞くまでもなかった。

ジュリアは最初から目を付けられていたのかも知れない。彼女が帰ったのを見計らってキースは追った。そして事件が起こった。

「僕が部屋に飛び込むと、奴は慌てて逃げて行ったよ。すぐに追おうとしたんだが、彼女が……ジュリアが止めたんだ」

病院での視線の意味がわかった。

真相を知るグスタフを口止めしていたのだ。ジュリアは。裁判沙汰にして会社を辞めるわけにはいかなかったのだろう。何よりも子供を大切にしている彼女だから、それは考えられた。

「馬鹿な奴だ」

エドガーの呟きにアンナが頷く。

「ほんと、そうですね！ 社長の息子だからってこんなこと許されない」

「いや……ジュリアのことだ」

そんなことのために。

生活のために罪を見過ぐすというのか。傷付けられたのを受け入れようというのか。それで本当にジョンが幸せだと思うのか——エドガーは苦虫を噛み潰す。

「奴の犯罪を立証するには、ジュリアの協力が必要なんだ」

さらに追い討ちを掛けられる。

状況証拠と目撃証言しかないとなれば、あとは被害者であるジュリア自身が彼を訴えなければならぬ。だが当の彼女は事件を封印しようとするしている。しかも警察当局が社に買収されているのは明白だった。

「何か、手はないのか」

祈るように呟くエドガー。

するとグスタフは、にやりとして言った。その言葉をずっと待っていたのかも知れない。キースを追い詰めるにはこの方法しかないと言わんばかりに。

「説得するんだよ、エド。それは君にしかできない。そうだろうか？」

軽薄な笑みに、利用されていると確信する。

一体どこからどこまでが彼の計算で事態が動いているのか、エドガーには想像できなかった。

第八話

家に戻ると、ジュリアはすでに帰宅していた。

日が落ち夕暮れがリノンの街を淡くセピア色に彩っている。その景色を窓から眺めていたジュリアは嘆息した。

「疲れてるのよ、エド。話はまた後日にしましょう」

「駄目だ。大事なことなんだ、ジュリア」

ジュリアはエドガーへと視線を移す。

その瞳は揺れていた。悲しみに暮れているのかと推測するも、それとはどこか違うようにも見えた。

「ジョンを施設に預けたままで、何を話そうって言うの」

「今日、奴に会ってきた。あのグスタフとかいう探偵だ」

息を呑むのを感じる。

ジュリアはその一言でエドガーの意図を理解したようだった。続ける。

「話は全部、聞いた。キースとかいう野郎、絶対に許すわけにはいかん」

「……無理よ、エド。私にはできない」

「できる。やらなくちゃ、ジュリア」

エドガーが伸ばした手をジュリアは避ける。

「お願い。このことはもう忘れるつもりなの。これ以上、私を苦しめないで……！」

悲痛な叫びだった。

全ての憎しみをぶつけてくるかのような、激しい視線。

「ジュリア……」

「ごめんなさい……ジョンを迎えに行くわ」

行かせてはならない。

咄嗟にそう思ったエドガーは彼女の腕を取った。そして、何をしようとしたのだろうか。強く握られた腕に顔をしかめるジュリアの表情に、はっと我に返る。

「す、すまん」

慌てて手を離す。

だがジュリアは何も言わず、逃げるように部屋を出て行こうとする。その時、電話が鳴った。彼女はそれを一瞥するが動こうとはし

ない。代わりにエドガーが受話器を取る。

「ウィリアムズだが……」

『息子は預かったと伝える。生きたまま返して欲しくば、二人でこちらまで来るんだな。場所は言わなくてもわかるはずだ』

早口でまくし立てる声。

機械で男か女かも判別できないほどに変えられた声だった。誘拐——すぐにそれだとわかった。

「おい！」

叫ぶが、もう通話が切れている。

プロの手口だと思い知らされた。手際が良過ぎる。恐らくはエドガーを監視していたのだろう。グスタフの事務所に出向いたのを契機に行動に移ったのだと容易に想像できた。

「……どうしたの？」

「ジョンが誘拐された」

表情を見なくても、ジュリアの顔が驚愕に歪むのがわかる。

「なんですって!？」

「俺のせいだ。すまん……恐らく、キースだろう。こちらまで来いと言っていた」

もはやジュリアの説得どころではない。

不用意に動いたことで余計な事態を生んでしまった。エドガーは自分の軽率さに腹立ちを覚える。

「オードリー社の最上階に、彼の住むペントハウスがあるの……」

震える声で呟くジュリア。

思っていたより、落ち着いているような気がしていた。現実を直ぐには受け入れられないのだろう。エドガーはそう判断する。

「警察は奴の飼い犬だ。俺たちで行くしかない」

それは死刑宣告に近かった。

キースが交渉に応じるかわからないが、彼らを生かして帰す保証はどこにもない。だがそれでも、ジョンを見捨てるわけにはいかなかった。

「わかってるわ」

そんな不安を打ち消すようにジュリアは強く頷いた。

第九話

街は夜の帳が落ち、月が顔を見せていた。

車を走らせるが、思うように進まず焦る気持ちとは裏腹に時間が掛かっていた。しかし車はパトカーではないためサイレンを鳴らして強行突破することはできない。

「急ぐことはないわ……ジョンには手を出さないはずよ」

「なぜわかる？」

エドガーは苛立っていた。

車が進まないこともそうだが、ジュリアが妙な落ち着きを払っているからだ。ショックから抜け切れていないのはわかるが、息子の命が危険に晒されているというのに、どこか他人事に思っているように見える。

「諦めるんじゃない。まだ方法はあるはずだ」

ジュリアは諦観してしまっているのか。

エドガーはそう判断した。しかし諦めるのは良くないことだった。気持ちがなくなればその時点で終わりなのだから。

「ええ……そうね。そう信じるわ」

言葉とは逆に、空虚な瞳。

エドガーはそれ以上、掛けてやれる言葉が見つからなかった。あの時、事件があった日と同じだと、彼は思っていた。一番身近にながら、何もしてやれない。その悲しみが広がり、やがて過ぎ去ると怒りが心を支配する。

（復讐のためなら、俺は悪魔にでも魂を売るぞ）

胸中で誓う。

ここまでジュリアを追い詰めたことを許すつもりはなかった。そうこうしているうち、やがてビルが見えてくる。窓の明かりは殆ど消えているが、最上階だけは明るく光っている。彼らの来訪を待ちわびているのがわかる。

「よし、行くぞ」

ダッシュボードから銃を取る。

没収された、署から支給されていたものとは別の、個人用に保管していたものだ。いざとなれば、それを使わなければならない。エドガーは生まれて初めて、人を殺す覚悟を決めていた。

第十話

内部に踏み込むと、ホールは無人だった。

ただ一人、黒服の男がエレベーターの前に立っている。案内役の者だろうと判断する。

「来たか。では武器がないか調べさせて——」

「その必要はない」

動こうとした男に銃口を突きつける。

「エド！ やめて」

「殺しやしない……このまま素直に案内してくれるならな」

男は顔を青ざめさせた。

無線機でエドガーたちの到着を知らせ、彼らに背を向ける。

「案内はするが……私に何かあったら、息子の命はないぞ」

「ふん」

エドガーは鼻で返事をした。

どっちにしろ生かして帰すつもりはないだろう。それならば大人

しく従って殺されるより、抵抗して死んだほうがましだった。

やがてエレベーターが到着する。

中に入り込むと、男は階数を選択するパネルの下にある鍵穴に、懐から出した鍵を差し込む。すると天井辺りにある電子表示に、選
択できる階数より上の数字が現れる。そこがキースの住んでいるペ
ントハウスなのだろう。

そして到着する。

男の背中に銃口を向けたまま、廊下を進む。その突き当たりに大
仰な両開きの扉がある。

「案内ご苦労」

「うっ！」

男の頸部を銃の底で殴りつける。

意識を寸断された男はどさりと力尽きて倒れた。ジュリアが怯え
るようにその様を見ていた。

「大丈夫だ。死んでない」

果たして彼女の心配はそれだったのか。

わからないまま、扉へと進む。押し開いて見ると、壁一面を夜景
を望むガラス張りにした広い部屋だった。そして、その中央に待ち
構えていた姿がある。

「ようこそ……待っていたよ」

見間違っはすもない。

資料で見た顔だった。キース・ヘルマン。両脇に護衛らしき黒服の男を従えている。

「ジョンはどこだ」

開口一番はそれだった。

まずは彼の安否を確認しなくてはならない。だがその部屋に少年の姿は見えなかった。

「子供にショックを与えなくなかったのですね……別室に移してある」

「黙れ、人質にしてるだけだろう！」

エドガーは激昂して銃口を突きつける。

護衛の男たちが身構えるが、キースはそれを手で制した。

「君は私を殺せない……そうだろう？」

勝ち誇ったようにキースは嘲笑する。

それは事実だった。ジョンを優先するならば、キースを殺すことはできない。それはどこかに監禁されているはずの少年の死に繋がる可能性が高い。

「では、取引というのか」

「なに？」

「君たちを呼んだのは理由がある。それは、事件を忘れてもらうためだ」

「……………」

キースは何を企んでいるのか。

その目を直視できずに、ジュリアは顔を背けて口を閉じていた。もう二度と見たくもない顔なのだろう。その苦しみをエドガーは怒りに変えてキースにぶつける。

「人の記憶はな、そう都合よく作り変えられるもんじゃねえ！」

「果たして、そうかな？——君が一番、知っていると思うが……まあいい。お互いにとって、良い解決法を思いついたんだ」

彼はにやにやと、面白がるように続ける。

「ジュリアを私の妻とする。その代わりに、君たちには平和を約束しよう」

「な……何を馬鹿なことを！？」

予想だにしない言葉。

どこまで本気なのか、キースの冷えた笑みから窺い知ることはいかない。

「それでいいわ」

エドガーはさらに困惑させられる。

プロポーズを受け入れたとも言つかのように、ジュリアはキースの元へと進んでいく。その表情はどこまでも虚ろだった。

「騙されるな！」

叫ぶが、止められない。

無気力になったものは疑うことをしなくなる。彼女の状態はまさにそれだった。

「ごめんなさい、エド……私、もう疲れたのよ」

キースの隣でエドガーに向き直って呟く。

その瞳はなぜか、哀れみに満ちていた。自分の運命を哀れんでいるのか、それとも。

「ははっ、見たまえ。彼女は君でなく、私を選んだぞ」

「やめる……」

キースはジュリアの腰に手を回した。

ジュリアも嫌がる素振りも見せず、知らない者が見れば恋人同士だと思ってしまうほど密着していた。

「今日からジュリアは私のものだ。毎晩、可愛がってやるさ」

「やめろ……！」

改めて銃を握りなおす。

怒りで頭が沸騰しそうだった。いや、本当に意識が白んでいくのを感じていた。血が上りすぎてしまったのだろつか、だが気を失うわけにはいかない——そう思いながらも、視界が徐々に霞んでいく。

「うおおあああああつ……！」

意味のない叫び。

それは悲鳴だったのかも知れない。エドガーの構えた銃はキースではなく、ジュリアに向けられていた。そのまま、引き金を引く。

空気が割れ、ジュリアは崩れ落ちた。

エドガーの意識はついに、そこで途切れてしまった。

第十一話

「ついに本性を現したな……それとも、悪魔に心に乗っ取られたのか？」

キースは不敵に言い放つ。

これから彼は戦わなければならなかった。この瞬間のために時間も金も、そしてジュリアの心を削ったのだ。

「悪魔だとお……そんなもの、いるわけないだろう。俺はエド……エドガー・ウィリアムズ。初めっから、最後までなあっ」

そこに立つ巨漢は、すでに別人に見えた。

剥いた目は血走り、口から泡を吹いている。尋常な状態ではない——だが彼は言った。自分はエドガーだと。

「馬鹿なことを言うな。どう見ても別人じゃないか。エドはどうしたんだ」

「それはこっちの台詞だぜえ……お前、何者だあ？」

気付かれるのは予想していなかった。

仕方なく、キースは変装を解き始める。顔に張り付いたマスクを脱ぎ、カツラを取って、懐から縁の丸い眼鏡を取り出す。そこにはもう、御曹司の姿はなかった。探偵グスタフ・エヴァンズ。

「こりゃあ驚いた……変装できるなんて聞いてねえなあ」

エドガーはげらげらと笑う。

「そりゃあトリックを先に話す馬鹿はいないだろうさ。そう……ここにキース・ヘルマンはいない。本物とジョンは僕の事務所でアナと帰りを待ってるよ」

にやりとして答える。

エクスタシーを感じる瞬間だった。敵を欺き、罠に嵌め、種を明かす。彼が探偵をやめられないひとつの理由でもあった。そこに正義はなく、趣味に興じる奇人の姿がある。彼にとって犯罪はゲームでしかない。

「どこからあ……どこまでが……お前の筋書きだった？」

「パーティーがあつた、事件の日から全てさ」

それを口火に、グスタフは語り始める。

ジュリアから依頼を受けた彼は、エドガーを尾行していた。

ピアニストとしてパーティーに参加していたのは嘘だった。ともかく、ドレスに着替えていつもより女らしい姿でジュリアは出かけた。その後を追う警官がいた。彼女の兄、エドガーに他ならない。パトロールという名目で署を出た彼は隠れ潜んでジュリアを監視していた。その後ろをさらにグスタフが見ていた。

「ちつとも、気付かなかったぜえ？」

「尾行は探偵のもつとも得意とする技術だからさ」

得意気に語り、続ける。

エドガーは予想通り、ジュリアを追った。

グスタフは注意深くその様子を監視していた。そしてジュリアがパーティーを途中退席した時、エドガーは動いた。彼女を無理矢理空いた部屋に押し込んで暴行へと及んだ。グスタフは事が始まる前に、現場に踏み込んだ。エドガーは慌てて逃げていった。その気になればグスタフを叩きのめすこともできただろうに。

「あん時はあ……そんな余裕なかったからなあ……畜生、やつちまえばよかったなあ」

「殴られていたら、ここにいる自信はなかった」

探偵は苦笑して、自分の非力さを認めた。

ともかく、状況証拠と目撃証言を作ることができた。だが直前になって、ジュリアはグスタフを止める。彼女はまだエドガーを信じようとしていたのだ。少なくとも、人格が変わる前の彼を憎む者はいないだろう。

「ふん、俺が作ったあ……偽のエドに騙されていただけだあ」

「偽者はどつちなんだ？ まあ、それを決めるのは僕じゃない。君自身が決めなくては、エド」

「何を……言っているう？」

そのための計画だった。

通報がされ、病院に姿を見せたエドガーはすでに昼の人格とでも言うべき、優しい彼に戻っていた。

あの時の彼に嘘はなかった。記憶が作り変えられているのだ。別人格とは。そして彼の知らないまま、署は彼の罪を隠蔽しようとした。現役の警官が暴行をしたというニュースは、署の評判を落とす要因となるからだろう。自分で自分の罪を暴こうとするエドガーは停職処分にされた。

「俺はあ……ほつとしたぜえ。あのエドは真面目過ぎるんだよお……馬鹿だな、自分が犯人だとも知らずによお」

エドガーは渴いた笑みを浮かべる。

「さて、ここからだよ。エド」

エドガーは予想通り、グスタフを頼った。

キース・ヘルマンが犯人であるという嘘の情報を作り信用させた。話は逸れるが、キースがセクシュアル・ハラスメントで訴えられたことはない。それすらも欺瞞だった。ともかく、話を信じたエドガーは誘拐されたジョンを救うためにやってきた。

「賭けだったが……確信はあった。ジュリアを取られまいとする君が、本性を現すだろうとね……だが実は、わからないんだ。君のど

こちらの人格が本当の君なのか。それを聞くためにこの状況を作ったんだよ」

「けけけ……面白いなあ……探偵さんよ。何度も言ってるように……俺こそが本物のエド」

「どうかな？ 君は嫉妬深過ぎるんだよ、エド。まるでそれが存在概念と言わんばかりに、ね」

エドの下卑た笑みが止まる。

核心を突かれたその表情にグスタフは満足し舌を滑らせる。

「擬似人格というのは、だ。歪んだ形で作られてしまうことがある。それは追い詰められた状況がそうさせるんだ。妹を守ろうと信念を持ち過ぎる余り、心のバランスが崩れた。崩れた心の欠片が、歪んで固まると新しい人格が生まれた」

「それが、俺だと……言いたいのか」

「あくまで推理に過ぎない。僕は心理学者ではないからね……犯罪を立証するのが僕の仕事だ。で、君が罪を犯したのは尋常ではない状態だったからか、それとも健全な心で計画的に行ったのか。それを確認する必要がある」

どちらであろうと罪は消えない。

エドガー・ウィリアムズは逮捕され、罪を償うために裁判を受ける。その裁量が心理状態によって少なからず変化するだけに過ぎない。グスタフにとってはどうでもいいことであった。

ただ、エドガーの本心を知ることが彼女の最後の依頼だったのだ。

「お、俺は……エドだ。や、やめろ……俺こそが本物だ！ お前じやないいいいいいい！」

「なんだ!？」

エドガーが頭を抱えて暴れ始める。

グスタフは身構えて警戒した。護衛二人がいるとはいえ、彼の巨躯を食い止めてくれる保証は無い。

「……あ、ああ……俺は、何てことをしたんだ？ 思い出した……思い出してしまった……ああっ、畜生！」

「エド？」

そこにはもう、狂気に満ちた男はいない。

一人の警官。そして純粹に妹を思う兄の姿があった。裏と表の人格が統合され、記憶が完全になったのだ。

「ジュリア……この罪は死して償う」

「!」

エドガーは銃で頭を撃ち抜いた。

そして力尽きてその場に崩れ落ちる。全てが終わった瞬間だった。

エピソード

「以上が——エドガー・ウィリアムズが異常な心理状態に支配されていたという証拠です」

重苦しい雰囲気が漂う。

裁判所の証言台にグスタフの姿があった。彼の編集したビデオテープは会場に流され、空気を濁らせていた。とてもすぐに受け入れられるものではないだろう。それはわかっていたことだった。

「宜しい。証人は下がちなさい」

中央の一番高い席に座る裁判長が告げる。

「待つてください。最後にひとつだけ」

視線で促され、グスタフは続ける。

「僕は思います。彼の精神は確かに正常ではなかった。しかし、犯した罪は償うに相当する大きな罪には違いがない……。悪魔なとは存在せず、悪は人の心に根付いているのです……。では、公正な判決の程を期待しています」

沈黙が場を支配する。

「……これより審議に入ります。判決は厳粛なる陪審員に委ねられます……では十五分の休廷を」

ハンマーが打たれ、静寂を破る。

神妙な顔つきをした陪審員と聴衆が退席していく。そのなか、グスタフは知った顔と会う。

「ありがとう、探偵さん。これで兄もきつと、判決を受け入れてくれるでしょう」

「いや……感謝されるようなことはしてないと思うよ」

ジュリアだった。

撃たれたと思われた彼女は、生きていた。そもそも、銃は空砲にすり替えていたのだから当然だ。もちろん、エドガーも生きている。ただ、被告席に彼の姿はない。

「ねえ、エドはどこに行ったの？」

見上げる視線と声があった。

ジョン少年だった。まだ幼い彼は真実を知るのに耐え切れるだろうか、グスタフは危惧していた。だがジュリアは全てを彼に打ち明けるつもりでいた……彼の父親がエドガーであることも。

彼女が身ごもった時、まだ付き合ったばかりの恋人はそれを嘆いて消えてしまった。真実を伝えることはできなかった。妹に恋人が出来たことに嫉妬した兄が、無理矢理孕ませたのだということを。彼の心がいつから歪み始めていたのか、それは誰にもわからない。当のエドガーにさえ。

「エドは……パパは病院にいるの」

「パパ？ エドはパパなの？」

ジョンは父親に良く似ていた。

エドガーがそれに気付かなかったはずはない。だが記憶を、意識を作り変えてしまい、何が真実なのかわからなくなっていたのだろう。

「先生ー！ もう時間が……ぎゃっ」

不意に声上がる。

入り口から姿を見せたアンナが呼んでいた。かと思つとつまづいて派手に転ぶ。ともかく、新しい事件が発生し、グスタフは捜査に追われている身だった。その忙しい合間を縫って証人喚問を済ませたのだった。

「すまない。判決まで待つてくれそうにないから、もう行くよ」

「ええ。エドの代わりにもう一度礼を言うわ……ありがとう」

ジュリアの表情にもう影はなかった。

苦しみから彼女はやっと解放されたのだ。これから新しい人生を歩もうとする強い女性の姿があった。

「いつか本人の口から聞くよ」

それだけ言うと、彼女たちに背を向ける。

一つの事件が終わった。それは人の心が生み出した悲劇だった。グスタフ・エヴァンズ。彼はそれを探求する旅人だった。犯罪はどうして生まれるのか。どこから芽生えるのか。彼はその答えを探し続ける。

だがその旅は決して容易ではない。

彼の蓄積した知識を持っても、複雑なトリックを仕掛けても、まだ何も見えてこない。

（いや、一つだけわかったことがある）

眼鏡の位置を直し、胸中で呟く。

善と悪は表裏一体の、切っても切れない関係にある。家族を守ろうとする愛は、それを独占しようとする欲望になることも有り得るのだ。何が悪で、何が善か。それは本来、同じ場所にあつて、明確な線引きできるものではないのかも知れない。それでも人は、それを峻別しようとする。

（だから……歪んでしまうのか？）

新たに沸いてしまった疑問。

それを解き明かせるのはいつになるだろうか……それすらも楽しみでしかない。真理の探求者にして最大の罪人は今日も笑う。まるでそれが彼の存在概念と言わんばかりに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2467f/>

Gustav - 悪魔に捧げる夜想曲 -

2010年10月9日21時31分発行